

祇園祭禮信記

四

金閣寺の段

〔解説〕 寶曆七年十二月五日から豊竹座上場。作者は中邑阿契・豊竹應律・黒藏主・三津飲子・淺田一鳥の五人。「信長記」の世界であるために、始めは「祇園祭禮信長記」といつたが、其筋の命で信仰記に改めたのである。

松永大膳は主君足利義輝を弑して天下横領の大望を抱き、金閣寺の高樓に居を構へ、その樓上なる究竟頂に將軍の母慶壽院を押籠めて人質となし、豪奢を極めて居る。その慶壽院の望みとあつて大膳は、天井の楠の一枚板に墨繪の雲龍を畫かせるために狩野將監の女雪姫と婿狩野直信とを召捕つたが、二人共容易に意に従はぬので、直信は牢に入らせ、雪姫に雲龍を畫くか、我に靡くか、さもなければ夫を殺すぞと言つて迫つた。雪姫は大膳の持つ太刀の奇瑞によつて父の敵は大膳と知り斬つてかゝつたが却つて縛せられる。姫は爪先で櫻の葩を集めて描く鼠の爲に助けらる。智謀を以て大膳に取入つた小田春長の臣此下東吉が慶壽院を救ひ足利家の二つ引兩の旗を奪ひ還し、遂に大膳を志貴山の城に攻滅すといふ筋である。全篇の場割りはいへば、第一段は大序、中祇園の段、切室町將軍館の段、第二段は口割普請、中花子の段、切芥子昌の段、第三段は口上爛屋、中輝若丸の段、切是齋内の段、四段目は口浮世風呂の段、中金閣寺基立の段、切雪姫爪先鼠の段、第五段は志貴山の段となつて居る。こゝに收めたのは四段目の中である。

本曲の雪姫は歌舞伎に於ては「廿四孝」の八重垣姫、「鎌倉三代記」の時姫と共に三姫と稱へられる難役である。浮瑠璃で雪姫を材題としたものは宇治加賀掾の「女繪師狩野雪姫」が最初らしい。その一段を宮古路豊後が轉用して「傳授の雲龍」と題して語つた。豊後節の最古曲として今も常磐津に傳へて居る。この雪姫に近松の「傾城反魂香」の上巻高島館の段の狩野四郎二郎の虎の段の趣向が取合せられて本曲の雪姫は描かれたものと思ふ。本曲初演の時は、金閣寺の三重のセリ上げセリ下げを用ひ、又若竹東二郎の遣つた此下東吉の人形の頭を、京都高臺寺の太閤の木像に摸して人形細工人船屋利助が造つた事などが大いに人氣を呼んで、寶曆九年春迄三年越打続け、その後も操で屢々繰返されたのみでなく、歌舞伎に入つても名高くなつた。

現行の稽古本も原作と同文である。

地をもく金閣と申すは。鹿苑院の相
 國義滿公の山亭。三重の樓。庭に
 は八つのヲシ致景を移し。夜泊の石岩
 下の水。瀧の流れも春深く。柳櫻を植
 るまぜて今ぞ都の錦なる。松永大膳
 久秀舊恩の主君を亡し。剩へ慶壽院
 を虜にしこの金閣に押しこめ置き。遊
 興に月も日も。立つや彌生の天箭にッ
 シゆとり。ある間の榮華なり。鬼當
 太相手に圍む碁の二番續けて勝のは
 ま。鬼當太もた負けたよな。白は源
 氏源の義輝を四つ目殺しにした松永。
 なか。我には續くまいと。鬼當黒
 白石片づけ。聞へ知らせの鳴子の綱。
 フシ引けばばら。立出づる。地石原
 新五郎丹藏川嶋忠治。大膳が前に手を
 つけば。同オ、呼出すは餘の儀でない。
 究竟、頂に押籠めた慶壽院。この天井
 楠の一枚板。その裏に雲龍を畫せよと
 雪姫も手に入

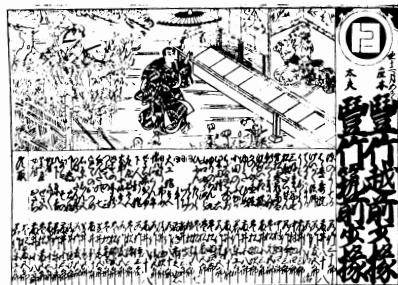
祇園祭禮信仰記
 此下東吉の頭
 若竹東三郎思
 附而是ヲ折く
 細工人
 龜屋
 利助
 是都
 高臺寺太閤様の
 木像ヲ遷セシトナリ
 目八玉眼ヲ入



此 下 東 吉 頭

圖した天井に墨繪の龍。直信に代つていたか。慶壽院が望みの通り言付くれ盡くか。但し抱かれて寝る所存か。どうぢや。どうぢやと責められて。姫はやうく顔を上げ。思ひも寄らぬ御難題。繪の事は祖父様より。家に傳はることなれば。何しに辭退は申さねども。し。殺して仕舞へば跡がさつぱり。その水草花鳥に事かはり墨繪の龍は。家秘の秘密。雪舟様より父將監まで傳はりしが。何者の仕業にや父を手にかける上に。家の秘書まで失へば。何を手本に驚くべき。その儀は赦して下さりませ。同じ事をいふ様なれど。直信殿と我が仲は。お前も知つてござんす通は兎角の答さへスエテ涙より外。なかり。お主様のお情で夫婦となつた義ける。かゝる所へ十河軍平。伴ふ此下義は女の嗜み事。私ばかりか夫まで牢入り來れば。こなたも障子をさしも舍とは情なや。かゝる愛目を見せんよぞ。さん候これこそ此下東吉。御奉公伏して。泣き居たる。問鬼當太アレ聞を望み能參は致せども。もし過もあら

んかと油斷いたさぬ此仕合せ。ハ、ハ。家を望む東吉何の用心許せ。の詞に従ひ、ッ刀を鞘に納むれば。ム、聞き及ぶ東吉よな。苦しうないつと參れ。身も信長には手を置きつるに。その信長を見限り大膳に仕へんとは珍重々々。ソレ腰が明いて見苦しい。



刀を赦して近うくと詞の下。地家來と一間を忍ぶ雪姫が。ステ心一つの物枕並べし例もある。それは子故。わしに持たせし指添刀。渡せば取つてさす案じ。詞囚れたを幸ひに。御恩を受けがの東吉。兩手をつかへ謹んで。詞御た慶壽院様。奪ひ返さうか。夫の命も差當る夫の命さうぢや。地さうぢやと覽の如く四尺に足らぬ此下東吉。甲州助けたし。地ア、どうかたと差俯き。千々に心を。フシカ、リ砕くは基立て大膳は。先手の石打つや。現の山藁の。細道此下が。詞一間飛びに入込んだも。松永を討つて取る。フシ岡目八目軍平が。助言と知らぬ大膳が。詞もあると打ちうなづきいそ此身を打任せ。枕交そつとい一言。言うたらいとい直信様。牢舍を助けてくれもせう。とは言へ憎いあの大膳。何と枕が交されう。厭というたら夫の命。詞危ない事の。大膳が石が既の事。アイや、死ぬるは此白石。どうやら通鯨の魚。白き方とはづんでござる大膳様。オ、サ、サ。には目が無うてあるか無いかの。地辻晩には一目。かう(劫)押さへて。この占を聞くとフシだく胸撫でおろし。東吉が中手を入れて。面白い信長でも直信でも。切つて仕舞へばだも残ら

ぬかい。いか様左様と當太が助言。軍抱いて寝た其上で直信は赦してくれうと負けるは追從輕薄。負腹の投打ちなら今一勝負遊ばされんや。サ、ハ、ハ、何番でもお相手と。地井目するたる東吉が。手段もさぞと。フシ知られたり。地大膳も納得し面白非の聲。調見かけに寄らぬ丈夫の現頼もしく。誠武士の肝要は軍の駆引。その駆引には智謀が第一。汝が才智を試みんには。地ハテ何をがなと思案の内。傍なる非箭をおつ取つて日常は岩下の井戸の中。さんぶと投込みいかに東吉。調今打込んだ非箭の器。手を濡らさず取つて得さす工夫やあるか。地と猶豫もなくオクリ庭に。おり立ち金筒桶。漲ぎる瀧の流れを直ぐに井の内へ暫時に汲取る早業は。井桁を越して水の上浮ちかへし。調四つの足の真中に。据ゑたる非箭は信長が。首を掲げこの如く。

ぬかい。いか様左様と當太が助言。軍抱いて寝た其上で直信は赦してくれうと負けるは追從輕薄。負腹の投打ちなら今一勝負遊ばされんや。サ、ハ、ハ、何番でもお相手と。地井目するたる東吉が。手段もさぞと。フシ知られたり。地大膳も納得し面白非の聲。調見かけに寄らぬ丈夫の現頼もしく。誠武士の肝要は軍の駆引。その駆引には智謀が第一。汝が才智を試みんには。地ハテ何をがなと思案の内。傍なる非箭をおつ取つて日常は岩下の井戸の中。さんぶと投込みいかに東吉。調今打込んだ非箭の器。手を濡らさず取つて得さす工夫やあるか。地と猶豫もなくオクリ庭に。おり立ち金筒桶。漲ぎる瀧の流れを直ぐに井の内へ暫時に汲取る早業は。井桁を越して水の上浮ちかへし。調四つの足の真中に。据ゑたる非箭は信長が。首を掲げこの如く。

ぬかい。いか様左様と當太が助言。軍抱いて寝た其上で直信は赦してくれうと負けるは追從輕薄。負腹の投打ちなら今一勝負遊ばされんや。サ、ハ、ハ、何番でもお相手と。地井目するたる東吉が。手段もさぞと。フシ知られたり。地大膳も納得し面白非の聲。調見かけに寄らぬ丈夫の現頼もしく。誠武士の肝要は軍の駆引。その駆引には智謀が第一。汝が才智を試みんには。地ハテ何をがなと思案の内。傍なる非箭をおつ取つて日常は岩下の井戸の中。さんぶと投込みいかに東吉。調今打込んだ非箭の器。手を濡らさず取つて得さす工夫やあるか。地と猶豫もなくオクリ庭に。おり立ち金筒桶。漲ぎる瀧の流れを直ぐに井の内へ暫時に汲取る早業は。井桁を越して水の上浮ちかへし。調四つの足の真中に。据ゑたる非箭は信長が。首を掲げこの如く。

首實檢の其時に用意に用ふる碁盤のましゝ。端したり／＼と松永兄弟軍平よ／＼軍師に頼みの盃。詞鬼當太軍平裏。端四つの足を四星に象り軍神の備も舌を巻き。かほど才智を備へし東吉。案内せよと。令する詞に兩人がオクリ伴へとし。小田を亡す血祭と盤を片手に御手に入るこそ吉左右めでたし。先づひへ奥に入りにつり。差上げしは。下邳の土橋に石公が脊を先づ一間に御入りあつて御酒宴もやと捧げし張良も。フシかくやとばかり勇勸むれば。いかにも／＼天晴頓智。い